

「冬の兵士」を見せていただきました。一人でも多くの人に観てほしいドキュメンタリー映画です。

人間性を破壊し尽くされた戦闘の中でPTSDに苦しみながら、戦争を止めるために立ち上がった帰還兵たち。彼らの証言は、「正義の戦争」がいかにも嘘であるか、何のために、誰に銃口を向けているか、そして、よいことをしたくて、人のために役立ちたくて軍隊に入ったと言う青年のことばかりは、マスコミがどれほど嘘を垂れ流し、人々を煽っているかがよく語られていますね。また、人を殺すことを任務とする軍隊において、人の精神がどうなってしまうのかがとつてもよく語られています。古今東西、軍隊とはそういうものであること、かつてアジアを侵略した私の父の世代もこうした状態に置かれ、戦争犯罪を重ねていったであろうことと重なりながら、観ました。軍隊に近い命令・服従の組織は、平時であるはずの今の私たちの身の回りにいくらでもありますから、そこでの自己の行動を、本当にこれでいいのか？と振り返ることにもなります。日本の私たちは、日本政府がイラク戦争に加担していることを自覚せずには見られないですね。

PTSDに苦しむこの青年たちのきつさを想うと、やりきれない気持ちになります。この生きることにまじめな青年たちが、生きていくためには、自分のしてしまったことと向き合い、戦争を止めるための行動を積極的にしていくことを抜きには、PTSDから解放されないんですよ。しかし、たたかう中で必ずや、自己を取り戻すと確信します。このことは、彼らとは比べ物にならない些細なことですが、私は自身の体験（\*）からわかります。

彼らは命令が絶対の軍隊においても、良心と自分の頭で考えようとする気持ちを、わずかながらも持ち続けることができた。帰還後、そのわずかな良心にPTSDが起きた。だから、壮絶な苦しみを抱えながら、自身が犯してしまった罪と胸のうちを外に向かって告白し、それによって良心を取り戻していくことになったのではないか。生きるために。彼らが人間として生きるために、立ち上がることは、困難であってもまた必然であったと、気づきました。

何よりも、冬の兵士、こうして立ち上がった人たちの存在は、国境も年齢も越えて人々を励まします。差別と人権侵害がますますひどくなる社会をすぐには変えることにはなりません、こうした人たちと一緒に生きていきたいと思います。私も希望と勇気をいただきました。

田保さん、本当にありがとうございました。

（\*）その体験とは—2001年1月に従軍慰安婦の授業をしたことで「苦情が寄せられた」として校長は「根津は家庭科の時間に家庭科ではないことを教えている」と保護者・生徒に触れ回り、指導力不足等教員に仕立てようとしてきました。多くの人の力があって、02年3月に指導力不足等教員にはされずに済んだのですが、それはそれはすごい攻撃でした。校長・市（都）教委・議員一体となった組織的な攻撃で、そのくらいなら私も耐えられるのですが、生徒たちが使われたことについては耐えられませんでした。

03年に異動となり、それまでの最寄り駅を通過して異動先の学校に通勤するようになると、その駅名の車内アナウンスを聞くだけで、心臓がドキドキするようになってしまったのです。確実に軽いPTSDだと思いました。このとき、都教育行政とたたかっていくことを抜きにPTSDは消えないと感じました。今は、たたかう中でPTSDは消えましたし、自己を見つめ、生き方を探ることができてよかったと思っています。

根津公子